

『中の根本の言葉を章とした知慧（根本中論）』

（第十八章）

もし、蘊が我であるならば、
生と壊を持つものになる。
もし、諸蘊より他であれば、
蘊の定義が無いとなる。 1

我性が有るのでなければ、
我所が有ると何処でなろうか。
我と我所が寂滅する故に、
我執と我所執は無くなる。 2

我執と我所執が無い者。
それも有るのではなく、
我執と我所執が無いと、
見る者によって、見られない。 3

内と外そのものに対して、
我と我所であると思うことが尽きれば、
近取は滅すとなり、
それが尽きることによって生が尽きる。 4

業と煩惱が尽きることによって解脱する。
業と煩惱は妄分別から。
それらは戯論から。戯論は、
空性によって滅すとなる。 5

「我である」とも名付けられ、
「無我である」とも示された。
諸仏が、「我と
無我は何ものも無い」とも示された。 6

述べられる対象が退いた。
心の所行が退いたことによってである。
生じておらず滅していない、
法性は涅槃に等しい。 7

一切は、まさしく清浄と、非清浄と、
清浄と非清浄であり、
非清浄ではなく清浄ではない。
それが仏陀の教導である。 8

「我である。」とも名付けられ、
「無我である」とも示された。
諸仏が、我と、
無我は何も無いと示された。(仏)

述べられる対象を斥けた。
心の所行を斥けたことによってである。
生じておらず滅していない、
法性は涅槃に等しい。(顕)

他より知るのではない。寂靜で、
諸々の戲論が発生させていない。
分別は無く、別義ではない。
それが真如の性相である。 9

何かに依拠して何かが起こる。
それは先ず、まさしくそれではない。
それより他でもない故に、
それ故に断滅ではなく、恒常ではない。 10

世間の守護者である諸仏の、
甘露となったその教法は、
同義ではなく、別義ではない。
断滅ではなく、恒常ではない。 11

完全な仏陀方が現れておらず、
声聞方も尽きたとなった
独覚の智慧は、
教示者無きより良く生じる。 12

同義ではなく、別義ではない。
断滅ではなく、恒常ではない。
それは、仏陀・世間の
守護者が示された甘露である。(11・仏)

完全な仏陀方が現れておらず、
声聞方が尽きたとなろうが、
独覚の智慧は、
依拠すること無く良く生じる。(12・仏)

完全な仏陀方が現れておらず、
声聞方も尽きたとなった
独覚の智慧は、
無所依より無く良く生じる。(12・中/頌)

「我と法を考察する」という第十八章である。

※ (中) は、『根本中論』新訳 (チョクロ訳) で、蔵比較編集版と異なる記述。

(仏) は、『根本中論』チョクロ訳 (『ブツダパーリタ』に引用された旧訳) で、パツァブ訳 (新訳) と異なる記述。

(頌) は、パツァブ訳 (新訳) ではあるが、『根本中論』本論と記述が異なる『頌句論』で引用された偈を示す。